

## 平成 27 年度 実践研究報告書

### ～集団指導におけるユニバーサルデザインを取り入れた授業づくり～

土佐市立高岡第一小学校 教諭 濱村 由起子

#### 1. 平成 26 年度における研究の概要

昨年度は「読み・書きの習得に困難を示す児童の認知特性に基づいた指導に関する研究～国語・算数における個別指導と集団指導の効果的な方法について～」を研究テーマとして、「読み・書き」「算数」につまずきが見られた 2 名の児童に対して、個人の認知特性を明らかにし、その特性に応じた効果的な指導方法の検証を目的として実践した。海津・田沼・平木・伊藤・Sharon (2008) が開発した多層指導モデル (Multilayer Instruction Model:MIM [ミム]) を参考に、個別指導 (3rd ステージ) と集団指導 (1st・2nd ステージ) を実施した。個別指導は週に 2 回放課後の時間に実施し、集団指導は 2 名が在籍する各クラスに主に国語、算数を中心として週 1～2 回、参加観察法により対象児童や学級の特徴に基づいたユニバーサルデザイン (以下 UD と表す) の授業づくりや支援の方法を助言し、特に個別指導を中心として検証を行った。

#### 2. 平成 27 年の実践内容

今年度は初任者担当となり、若年教員の先生に、すべての子どもが「分かる」「できる」授業づくりの力をつけてもらうためにも 1st ステージを中心とした「集団指導における UD を取り入れた授業づくり」について実践研究を行った。

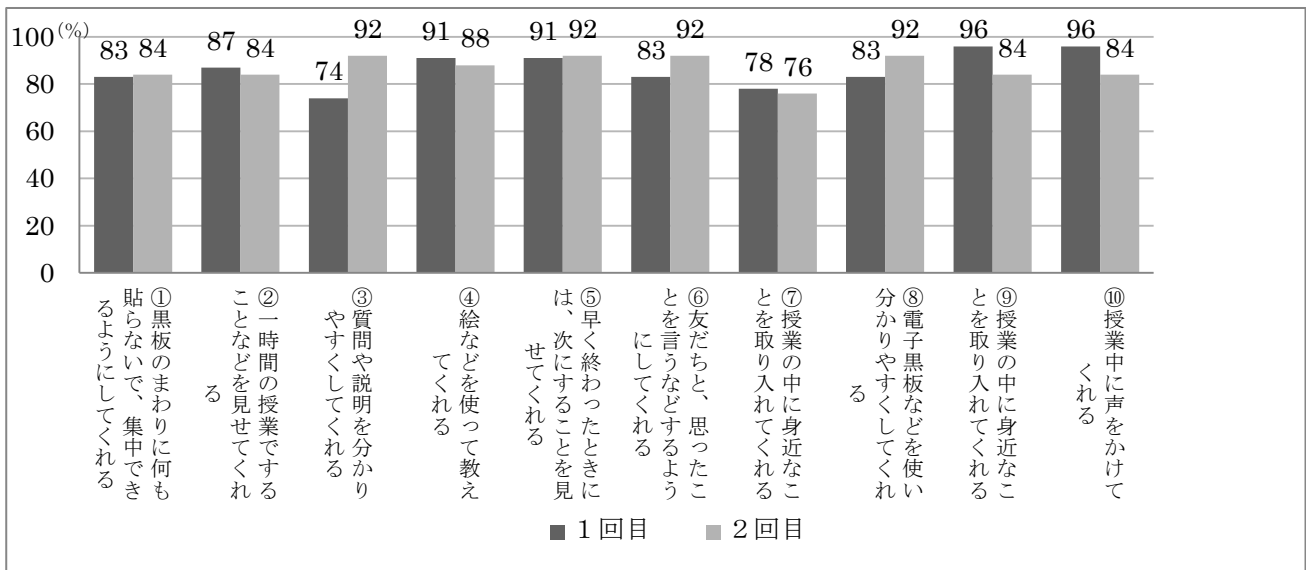
##### (1) 対象と方法：

対象は 2 クラス (1 年生・3 年生) とし、週に 1～2 回担任の指導方法や学級の児童の様子を参観し、指導・助言を行った。また、参観者 [以下筆者のことを表す] が UD を取り入れた授業を各クラスで行い、担任に参観してもらった。筆者が授業を行う際は 1st ステージに対する支援を高知県教育委員会が平成 25 年に作成した『すべての子どもが「分かる」「できる」授業づくりガイドブック』の 5 つの視点 (【環境の工夫】【情報伝達の工夫】【活動内容の工夫】【教材・教具の工夫】【評価の工夫】) を踏まえて提案し、UD の授業のイメージを担任に持ってもらうよう心掛けた。5 月と 11 月に担任の授業に対しての授業アンケートを児童と担任に実施し、考察した。アンケートは 5 つの視点の【環境の工夫】：①黒板のまわりに何も貼らないで、黒板に集中できるようにしてくれる②1 時間の授業の中ですることと、今していることを分かりやすく見せてくれる【情報伝達の工夫】：③質問や説明を分かりやすくしてくれる④絵やものなどを使って分かりやすく教えてくれる【活動内容の工夫】：⑤早く勉強がおわったときには、次にすることを見せてくれる⑥友だちと、思ったことを言ったり聞いたりするようにしてくれる【教材・教具の工夫】：⑦授業の中に身近なことを取り入れ、考えやすくしてくれる⑧パソコンや電子黒板などを使って分かりやすくしてくれる【評価の工夫】：⑨○印やシールなどを使ってがんばりが見えるようにしてくれる⑩授業中に、わたし (ぼく) に声をかけたりしてくれるの 10 項目の内容で行った。

##### (2) 結果と考察

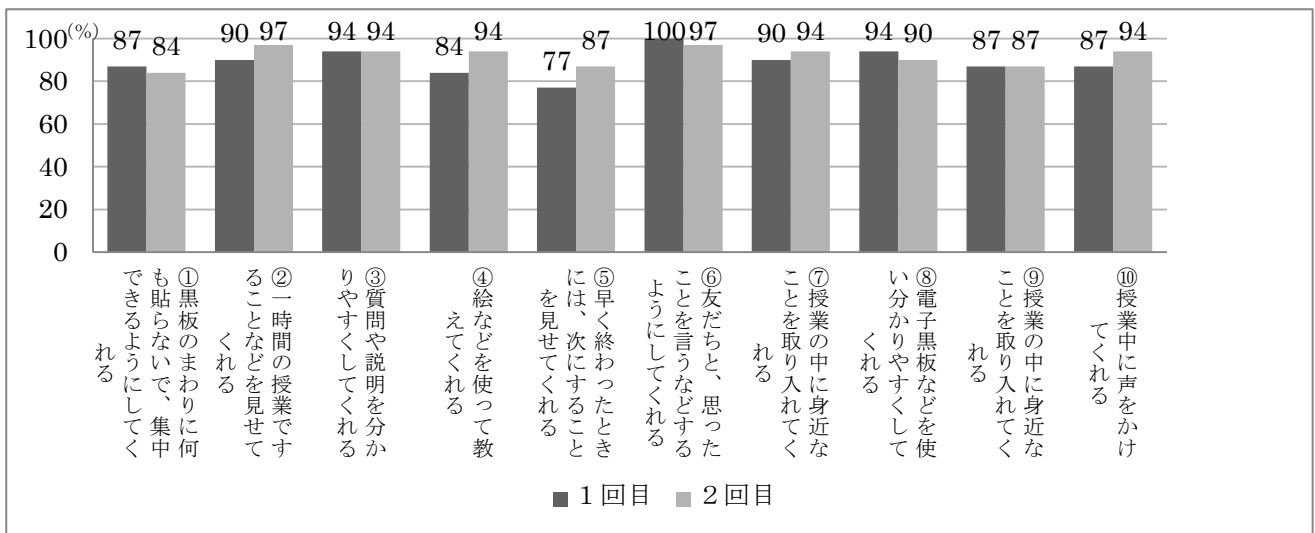
児童に実施した 2 回のアンケート結果より、1 年生では肯定的評価が 1 回目と比べて特に上がった項目は「③質問や説明を分かりやすくしてくれる」「⑥友だちと、思ったことを言ったり聞いたりするようにしてくれる」「⑧パソコンや電子黒板などを使って分かりやすくしてくれる」であった (Figure 1)。反対に肯定的評価が下がった項目は、特に「⑨○印やシールなどを使ってがんばりが

見えるようにしてくれる」「⑩授業中に、わたし（ぼく）に声をかけたりしてくれる」であった。③は1回目に10項目の中で特に児童からの評価が低かった項目であり、担任自身がそのことを念頭に置いて意識して取り組んだことで評価が上がったと考えられる。また、5月初旬は担任自身が授業や児童に慣れず、具体的な発問等が十分ではなかったが、経験を積むことで担任自身の授業力が向上したことも挙げられると考えられる。⑥は担任が特に力を入れて今年度実践した項目で、話し合い活動を授業の中に日常的に取り入れることで評価が上がったと推測される。⑧は2学期からデジタル教科書を全クラスで使用できるように環境が整ったことが挙げられる。肯定的評価が下がった⑨、⑩は担任自身のアンケートでも「常に意識している」から「少し意識している」に評価が下がっていた。2つとも1回目は他の項目と比べて特に児童からの評価が高かった項目であり、担任のアンケートでも「常に意識している」という回答であった。担任が意識して取り組むかどうかで、児童の意識が変わってくると考えられる。



【Figure 1 : 授業アンケート結果（1年生）】

3年生では、肯定的評価が1回目と比べて特に上がった項目は「②1時間の授業の中ですること、今していることを分かりやすく見せてくれる」「④絵やものなどを使って分かりやすく教えてくれる」「⑤早く勉強がおわったときには、次にすることを見せてくれる」「⑩授業中に、わたし（ぼく）に声をかけたりしてくれる」であった（Figure 2）。反対に肯定的評価が下がった項目は、特に「⑧パソコンや電子黒板などを使って分かりやすくしてくれる」であった。②は1時間の流れを算数では「問題→めあて→一人→ペア→全体→まとめ→練習」とパターン化することで児童も見通しを持つことができ、それに伴って⑤の項目の肯定的評価も上がったと考えられる。⑩は1回目に担任が「常に意識している」と回答していたが児童の評価とはずれが見られた項目である。担任自身が、そのことを念頭に置き意識して取り組んだことや、集団に指示した後、個別に声がけをしたり、机間指導の際、良い所や頑張りを即時評価したりすることで児童にも実感が伴ったと考えられる。反対に⑧はICTを用いるよりも④の具体物や掲示物を用いた授業展開を中心に行っていたため肯定的評価が下がったと考えられる。UDを取り入れた授業を行うことで、「今日の授業は分かりましたか」の質問に対して、児童は「とても分かった」が57%から73%になり、「全く分からなかった」7%、「分からなかった」4%がそれぞれ0%になり、全員が「分かった」と回答し、児童の学習理解が深まったと示唆される。



【Figure 2 : 授業アンケート結果 (3年生)】

### 3. 平成 27 年度の実践の成果と課題

教師と児童との授業に対する意識のずれに早期に気づくことで、担任が自分自身の授業について振り返ることができた。それにより、一人ひとりの特性に応じた「分かる」「できる」授業づくりを目指した指導方法を日々模索する中で、担任が UD を意識した授業に取り組むことにより、児童の学習理解を深めることにつながった。UD を取り入れた授業を行う上で、教師の意識の大切さを再確認できた。課題は UD を取り入れるだけではなく、その中でもさらに効果的な方法を提示することが大切ということである。例えば、グループでの話し合い活動について、担任自身の授業後の振り返りとして話し合い活動が活発に行われるためには、児童が話し合う活動の内容がはっきりと分かり、誰と、どんなことをどのくらいの時間で話し合うかが明確な場合であり、反対に何を話していいのか迷っている時は、活性化しなかったという感想も指導上留意しておくといよい。それにより、児童の「満足感」や「達成感」は異なってくる。児童が日々の授業を通して「満足感」や「達成感」を得られるためにも、さらに効果的な UD を取り入れた授業づくりの方法についてこれからも研究を推進していきたい。

#### 《引用・参考文献》

- 高知県教育委員会(2013). 『すべての子どもが「分かる」「できる」授業作りガイドブック～ユニバーサルデザインに基づく発達障害の子どもだけでなく、すべての子どもにあると有効な支援～』
- 海津亜希子・田沼実敏・平木こゆみ・伊藤由美・Sharon Vaughn(2008). 通常の学級における多層指導モデル (MIM) の効果<sup>1</sup>—小学校 1 年生に対する特殊音節表記の読み書きの指導を通じて— . 教育心理学研究, 56, 534-547